

ふじあざみ



富士川河川敷に広がる紅色のじゅうたん(桜えび干しの様子)

富士山の絶景と 桜えびの街 由比町

■宿場町として栄えた由比町

かつて東海道五十三次16番目の宿場町だった由比は、温暖な気候で海と山に囲まれ自然に恵まれた町です。浜石岳から富士山を望む景観は東海道随一と言われ、サツタ岬から見る富士山や駿河湾も絶景です。

そんな由比町の代表的な特産物が桜えび。由比の桜えびと言えば全国的にも最高の食材と珍重されています。

■特産「桜えび」の生態

桜えびは甲殻類(カニ・エビのなかま)サクラエビ科に属し、体の表面に160個余りの発光器を備えた体長4~5センチの一年生の小さなエビです。海中で生息している桜えびは、甲殻が美しい透明な桜色をしていて、名前の由来はここから来ています。

深海性の生物である桜えびは、昼間や夜には、200~300メートルの深さの海中に生息しています。闇夜には20~30メートルの上層まで浮

遊して厚い群れを作りますが、明け方にはまた、群れは散って下降し始めます。



写真提供:由比町役場企画観光課

桜えびは駿河湾だけでなく、駿河湾近海の遠州灘・相模湾・東京湾でも生息しているようですが、駿河湾に比べ、その数は極めて少ないそうです。桜えびは本来深海生物として知られているにも拘わらず、駿河湾内の桜えびは富士川・安倍川・大井川の河口付近沿岸の淡水の混入する河口付近におり、かつ200メートル程度の比較的浅い水深に生息しており、このような例は極めて珍しいといわれています。

■桜えび漁のはじまり

今では由比の名物として定着している桜えびですが、桜えび漁がはじまったのはそれほど昔のことではありません。100年ほど前に、ちょ

つとした偶然からはじめました。当時アジ漁をしていた漁師の網の浮き樽がはずれて網が深く沈んでしまいました。ところが、それを引き上げると大量の桜えびが入っていたのです。この偶然によってどこまで網を入れれば桜えびがとれるかわかり、この「大発見」以来たちまち桜えび漁が発展していったということです。そして、一年中漁をおこなっていたようですが、現在は春漁と秋漁の2回に制限しています。春漁は3月下旬から6月上旬まで、また秋漁は10月下旬から12月下旬までの間で行われています。

■富士川河川敷の紅色のじゅうたん

富士川河川敷では、春と秋の漁期間中の早晨から桜えびの天日干し作業が行われます。その光景は、まるで紅色のじゅうたんを敷き詰めたような壯觀です。この地方の風物詩にもなっている天日干しは天気の良い日に行われ、じゅうたんの向こうには美しい富士山も望むことができます。

富士砂防事務所では、日本の大動脈である東名高速道路・国道1号・JR東海道線・情報通信網等が集中する由比地区において、豪雨や東海地震等により大規模な地すべりが発生する恐れがあるため、今年度より直轄地すべり対策事業調査に着手しています。

富士曼陀羅図に描かれた清見寺

富士山の基礎知識

古来より伝わる「富士曼陀羅図」には当時の人々の富士山信仰に対する思いが見てとれます。図の一部に描かれた「清見寺」の様子から、当時の富士参詣の様子と、関所との関わりを探ってみましょう。



富士曼陀羅図(伝狩野元信・富士山本宮浅間大社)

■清見関と清見寺

三保の松原と並ぶ駿河の名所と言わされた「サッタ岬」付近には、古くから関所が設けられていました。海岸に沿って走る海道には北側から山が迫っているため、東国の敵を防ぐには格好の場所だったのです。そして、清見関と名付けられたこの関所付近は、数々の戦いの舞台となりました。清見寺の創建の時期は明らかではありませんが、清見関を守るために関守として建立されたのが始まりとされ、その時期は平安後期にまでさかのぼります。その後清見寺は関寺として国からの収益を後ろ立てに繁栄しましたが、鎌倉時代に入ると律令制の崩壊とともに経済基盤を失った関所は衰退してきました。

■富士曼陀羅図に描かれた清見寺の関所

富士山本宮浅間大社に、今から500年ほど前の富士信仰の様子を描いた「富士曼陀羅図」が伝わっています。この図を人々に掲げて絵につ

いてひとつひとつ説明しながら信仰への勧誘を行ったもので、俗に「絵解曼陀羅」とも呼ばれます。

写実性に富んだこの図は、当時の風俗習慣や建築物を探る上で貴重な資料となっており、その中に描かれた清見寺は朱塗りの柱に金色の九輪がまばゆく映える三重の塔「瑞雲庵」がひときわ目立ちます。

この時代に清見寺があったことは「宗長手記」の中の「瑞雲庵、塔よりうへにあり」という記述によって確認できます。また、塔は五重塔であったと諸記録に記されているので、この図の塔はのちに再興された塔と思われます。

この図で注目されるのは、清見寺の門前に關所が見られることです。簡素な門ですが、南側の柵は波打ち際にまでおよんでいます。番所というべき小屋の中には僧侶の姿が見受けられ、この關所が清見寺の施設であったことがわかります。



富士曼陀羅図(清見寺の關所付近拡大)

■關所通過は富士参詣の行程

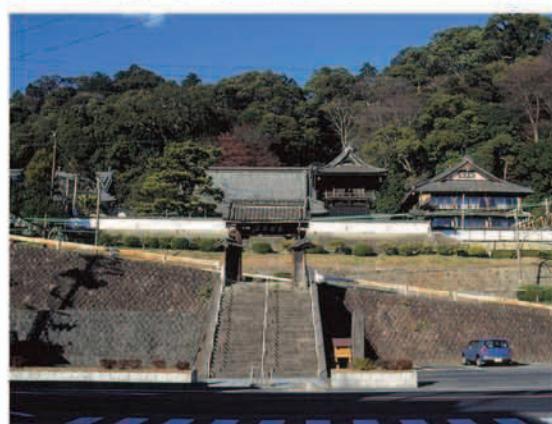
さて、もう一度「富士曼陀羅図」に目を向けてみると、図には關所を通過したばかりの富士参詣の一一行の姿が見られます。彼らは富士山への往復にあたって、清見寺の關所で通行税を支払わなければなりませんでした。

戦国時代の駿河・甲斐にはこうした富士参詣者をおもな対象とした關所が各地に設けられていました。したがって富士信仰の繁栄は、清見寺にも多くの経済効果を及ぼしていたと思われます。

このように「絵解曼陀羅」に三保の松原や清見寺の關所が登場するのは、すでにこれらが当時から人々を旅へいざなう名所・旧跡の地であったからと思われ、關所「清見寺」の通過は富士参詣への一行程でもあったのです。

■地すべりによる崩落と清見寺の被害

さった峠付近をはじめ、由比町周辺は古くから地すべりの被害が頻繁に発生し、住民を悩ませてきました。清見寺でも「名勝庭園」の北側斜面で頻繁に崩落が発生しています。最近では平成12年から15年の間に4回の崩落が、いずれも6月から7月にかけての梅雨時に起こっています。幸い清見寺の建物への被害は崩落時に飛んできた石によってガラスが割れた程度ですが、梅雨時は常に注意が必要だといいます。



現在の清見寺

この地域は海が山にせまつた急斜面であると同時に、堅い岩盤状の地質の上にやわらかい土が乗っている構造であるために地すべりが頻発すると考えられています。

富士山に暮らす

江戸時代に庶民の間に広まった富士山信仰。その背景には「御師」と呼ばれる信仰の指導者を中心とした団体で富士山参詣を行う「富士講」がありました。さらに、様々な事情により登山ができない人々のために擬似参拝ができる「富士塚」が造られ、信仰に拍車をかけたのです。

江戸時代の庶民の心をとらえた「富士講」

■富士山信仰の歴史

富士山は昔から火を支配する神様の住む山としてあがめられてきました。そして、鎌倉時代には山岳修験者と庶民の富士信仰が結びついて登山修行を行う山へと変わっていきました。やがて室町時代に入ると富士信仰はさらに盛んになり、江戸時代には「富士講」という団体ができ、人々は富士山参詣を行うようになります。江戸末期には「江戸八百八講」といわれるほどたくさんの富士講の団体ができました。

■富士塚で模擬登山

そのような中、江戸の町には、富士山に登ることが禁じられていた女性や、長旅が困難な人たちも模擬富士参詣ができるように「富士塚」と呼ばれる高さ数メートルのミニ富士山が多く造られました。この小さな富士塚登山が江戸の町人の間で大流行したということです。



写真：模擬参詣を行う様子を描いた絵「深川の富士」（「富士の信仰」より）

■富士講を広めた御師

夏になると富士講の信者たちは富士登山のために河口や吉田へやってきます。この信者たちの世話や指導をしたのが「御師」と呼ばれる人たちです。御師は富士山信仰の指導者で、宿泊所を提供したり、富士講を広める役割も持っていました。そして彼らの生活は、自らが経営する宿泊所での信者からの宿泊料や通行料、おはらい料、お札、



写真：復元された御師の家（富士吉田市郷土館）

お布施などの収入によって保たれていました。御師と信者は師匠と弟子の関係にあり、一度縁を結ぶと信者は他の御師の宿泊所に泊まることはありません。御師にとってはできるだけたくさんの信者を自分の弟子にすることが大切で、シーズンオフには江戸を中心に「講社まわり」といわれる弟子の勧誘にまわったということです。

非常に栄えた富士講と御師ですが、文明開化以後の新しい社会とともに徐々に衰退してきました。かつての御師の家は、今は民宿などに生まれ変わり、その家の様子や、富士講の歴史を物語る資料、品物などが昔のおもかげを見せています。

富士山に寄せる想い

周辺の遺跡から古代の人々の富士山への想いを探る

富士山周辺では古くから富士山に影響を受けた生活が営まれてきました。それを垣間見ることができるのが遺跡の数々。今回は富士宮市で文化財の保護を担当する渡井英薫さんにお話を伺いました。「思い出すのは小学生の頃、方位の勉強のとき富士山は東と教わり、方向を覚えましたが、東京に行ってからは平地ばかりで目標物がなく方向音痴になってしまいました。」と笑顔で語る渡井さん。今では富士のふもとで遺跡と格闘する日々。現在は富士宮の潤井川、富士川近辺の遺跡分布からその動向を検討中だそうです。

■富士宮の遺跡に見る富士山との関係

富士宮には200近くの遺跡があり、その分布状況に富士山とのかかわりが見えるそうです。主に平安以前の遺跡に見られる特徴を伺いました。「新富士溶岩の影響を受けていない平地に遺跡が多いのです。それは、水を通しにくい古富士溶岩と水を通しやすい新富士溶岩の間に水がとおり湧水として湧き出て生活用水が確保できたからと思われます。遺跡の分布に偏りが多いのも富士山溶岩の到達先との関係と思われます。弥生時代中期には、富士宮に集落跡の遺跡が存在しないのは水田依存型の村が中心になったため水田を作りやすい平地に村が移動したと考えられます。しかし後期のある時期を境に山に人が戻ってきます。この

番難しい領域なんです。」その後、鎌倉時代以降には富士山中に人が進出し始め、江戸時代には用水が整備され、より高地に人が進出します。そして富士山信仰も一般に定着していましたと言います。ロマンあふれるお話を語ってくださいました。

■遺跡保護の課題

渡井さんの具体的な活動は、何年かごとに実際に歩いて畠や小工事のあとを見て周る「分布調査」と、その調査によって遺跡存在の可能性が発見されれば遺跡の様子を確認する調査、記録として遺跡を保存する発掘調査と作業を進めます。「遺跡・遺物は国民共有の財産なので、いかにそれを保存保護し、より多くの方に見ていただけるかが今後の課題だと思います。」

■遺跡は過去からのメッセージ

最後に、富士山や遺跡とどう向き合っていくべきか伺いました。「各地域の地名や遺跡・古文書には過去からのメッセージが多く含まれています。これらを皆さんと共に大事にしていきたいと思います。そして、富士山の麓に住む我々のその地域にある特色を守りつつ生活していくければいいなと思います。」



丸ヶ谷戸遺跡



■プロフィール
渡井 英薫 (わたいひでよ) 氏

昭和34年4月3日生まれ。富士宮市教育委員会文化課学芸員。日本考古学協会会員。

お知らせ

1ヶ月で3つの台風襲来

	雨量	富士砂防事務所 土砂災害等対策部設置状況
台風21号	9月29日～30日 総雨量52mm 勢子辻雨量観測所(富士市標高980m)	準備体制
台風22号	10月8日～9日 総雨量348mm 五合目雨量観測所(富士宮市標高2,395m)	注意体制
台風23号	10月19日～20日 総雨量285mm 品荒雨量観測所(富士宮市標高945m)	注意体制

富士砂防事務所管内においては、土石流などによる土砂災害の発生はなくまた、それぞれ台風通過時、台風通過後に管内の渓流を点検した結果、異常はありませんでした。

新潟県を中心に震度6強の地震

10月23日(土)をはじめとして、新潟県を中心とする震度6強の強い地震が頻発しています。中部地方整備局管内においても東海地震が懸念されており、富士砂防事務所としても地震時の土砂災害に注視していきます。

平成16年度 第1回富士砂防事務所工事安全協議会

9月17日(金)に当事務所所管の工事、調査等の安全衛生活動に関する連絡調整を図り、建設労働災害及び交通事故の防止、安全衛生管理意識の高揚を図るため、「平成16年度 第1回富士砂防事務所工事安全協議会」を開催しました。また、交通事故の現状、道路交通法について、富士宮警察署 森島交通課長を講師に迎え、交通事故についての近況、道路交通法について講演して頂きました。

由比地すべり対策検討委員会

今年度から静岡県庵原郡由比町サッカ山において地すべり調査に着手しました。調査の一環として「由比地すべり対策委員会」を設置し、地すべり機構とその対策の基本的な方針について検討しており、現地での地質調査において採取されたボーリングコア(試料)観察を9月6日(月)および9月7日(火)に行い、併せて意見交換会を開催しました。

また、10月22日(金)には、「第2回由比地すべり対策検討委員会」を開催し、現時点までの調査結果等に基づき、地すべり機構解析および地すべり防止工事の基本方針などを検討しました。



写真:ボーリングコア(試料)観察の様子

由比地すべり対策事業促進期成同盟会が要望書提出

由比地区の地すべり対策事業を早期着手するように静岡市、富士市、由比町、蒲原町、富士川町で組織する「由比地すべり対策事業促進期成同盟会」から、国土交通大臣(11月5日)、中部地方整備局長(11月4日)、富士砂防事務所長(11月4日)に要望書が提出されました。

住民への富士山ハザードマップ検討委員会 最終報告説明会

6月に富士山ハザードマップ検討委員会の最終報告を受けて、内閣府や富士山火山防災協議会等主催により、9月10日(金)富士吉田・富士五湖文化センターにて「富士山ハザードマップ検討委員会最終報告説明会」が開催されました。今後の地域防災対策の在り方などについて荒牧委員長が説明しました。

2004火山砂防フォーラム

9月30日(木)、火山砂防フォーラム委員会主催の「2004火山砂防フォーラム」が岩手県西根町にて開催されました。前半は、岩手山周辺の小学生が協力してつくった新しい「岩手山の見どころマップ」作成の様子を報告、後半は「火山地域における連携 その成果と課題」と題した座談会が行われました。

2005年度の火山砂防フォーラムは、富士宮市で開催予定です。

環富士山火山防災協議会(準備会)

富士山麓に位置する山梨、静岡両県の周辺市町村は10月18日に富士吉田市の県環境科学研究所で富士山の噴火に備えて広域の防災協議会設置のための準備会を立ち上げました。準備会において、協議会の名称を「環富士山火山防災協議会」と内定し、11月下旬の発足をめざして、県域を超えて連携を進めています。

富士学会第2回研究発表会

10月23日(土)、24日(日)に富士学会主催により「富士の光を観る」をテーマに第2回研究発表会が開催されました。1日目は、立教大学観光学部の溝尾良教授と日蓮宗本巣寺住職による基調講演と研究発表会、2日目は、富士山をテーマとした現地スタディーツアーを行いました。富士砂防事務所からは調査課長の伊藤が富士山大沢扇状地の現状と管理について発表しました。

溶岩流国際シンポジウム2004

10月29日(金)、30日(土)に山梨県環境科学研究所の主催により、溶岩流国際シンポジウム2004「溶岩流の制御と防災」が開催されました。火山防災の先進国であるイタリアとアメリカ(ハワイ)の専門家により自国の事例について紹介していただくとともに、日本からも専門家を招いて自由な討論を行い、これから課題を議論しました。

大沢崩れと御中道見学会

10月7日(木)と10月14日(木)に、「大沢崩れと御中道見学会」を開催しました。2日間延べ90名の参加者が富士山大沢崩れの規模や荒廃状況、紅葉した御中道の自然を見学しました。



写真:大沢崩れ見学の様子

かりがね祭りへの出展

「かりがね祭」は、その昔、暴れ川だった富士川から神殿を守るために古郡氏が親子三代で成し遂げた「雁堤」の偉業と氾濫を納めるために人柱となった犠牲者をとむらうため、毎年10月の第1土曜日に富士川のかりがね堤(富士市岩松地区)で行われています。今年も富士砂防事務所からパネル展示と土石流模型実験を実施しました。

富士山総合学習及び現地見学会結果報告

実施日	見学者等	参加人数	行事内容
8月30日(月)	富岳高校	2名	総合学習
8月31日(火)	イタリア研修生	1名	概要説明と扇状地見学
9月 7日(火)	JICA(ネパール)	1名	概要説明と扇状地見学
9月13日(月)	京都府議会 環境防災対策委員会	10名	概要説明と扇状地見学
9月16日(木)	富士宮青年会議所	6名	総合学習
9月16日(木)～17日(金)	イラン国	5名	概要説明と扇状地見学
9月21日(火)	市内中央町常磐区高齢者	25名	概要説明・講演会
9月27日(月)	JICA(インドネシア)	1名	概要説明と扇状地見学
10月 5日(火)	熊本県議会建設常任委員会	17名	大沢川扇状地見学
10月 6日(水)	源道寺区長寿会	40名	大沢川扇状地見学
10月 6日(水)	日本建設機械化協会 海外研修員	12名	概要説明と扇状地見学
10月 6日(水)	富士市・富士宮市理科教員	90名	概要説明・講演会
10月12日(火)	静岡県議会	40名	大沢川扇状地見学
10月28日(木)	富士宮第四中学校	9名	総合学習
10月29日(金)	富士宮第一中学校	10名	総合学習

●ご意見・ご感想・ご質問など、お気軽にお寄せください。

富士山に関する古い写真・資料等をお持ちの方、また災害体験をされた方の情報提供をお願いいたします。

●お問い合わせ・ご連絡先

■国土交通省富士砂防事務所

〒418-0004 静岡県富士宮市三園平1100

担当 / 総務課長・釜崎、または調査課長・伊藤まで

TEL.0544-27-5221

インターネット <http://www.cbr.mlit.go.jp/fujisabo/>

■富士宮砂防出張所

〒418-0103 静岡県富士宮市上井出826-1

TEL. 0544-54-0236

「ふじあざみ」に掲載している内容・データ等は、現時点までに得ている調査結果を基にしています。

今後の調査等の進展により、内容の一部または全部に変更が生じる場合もあります。